

## 函館ワンニャン物語 ⑪ ～キミー 1～

### ◆アニマルレスキュー犬舎

抑留所での譲渡会から、一年が過ぎている。  
館岡家族は休日を利用し、アニマルレスキューで保護している犬、猫のお手伝いに来ている。  
咲が一匹の猫をじっと見ている。

咲「この猫、キミーに似ている・・・。」

聖子「そうね。何となく似ているね。」

咲「何となくじゃなくて・・・、とても似ている。」

一年前に携帯電話で撮っていたキミーの写真を見せる。

咲「鼻のこの模様、それから体の模様、どこもそっくり信じられない。」

聖子「そう言われると、ほんと、そっくりね。この猫、どこで保護されたか、代表さんに聞いてみるね」

聖子は、小走りで代表のもとに行く。  
代表としばらく話し合った後、やがて咲のもとに来る。

聖子「新川町の三角グラウンドに、段ボール箱に入れられて、三日前に捨てられてたそうよ。二匹いたんだけど、一匹は昨日、赤川に住んでいる人がもらって行ったんだって。」

咲「キミーをあげた昭和町の家に行ってみていい？」

聖子「そうね。気になるし、これから行ってみましようか。」

#### ◆昭和町（キミーとステフがもらわれた家）

聖子と咲で、一年前にキミーとステフがもらわれて行った昭和町に行く。

転居をしたらしく、その家には誰もいない。

近所の人に聞いてみるが、引っ越し先は分からない

咲「もう一匹捨てられていた、赤川の猫、見に行ってもいい？」

聖子は、携帯電話で代表と話をする。

もらわれて行った先の住所を聞き出す。

#### ◆赤川町

二人で赤川に向かう。もう一匹の猫を見て確信する。

咲「ほら、ステフだよ。間違いない。ママ、ステフに間違いない。やっぱりあの猫は、キミーだよ。ママ、間違いない。キミーとステフに間違いない。」

咲は、興奮しながら繰り返す。

聖子「そうね。間違いないみたい。」

聖子は、現実を冷静に受け止めながらも、怒りで震える。

その後、代表に会い事情を説明する。

その日から、キミーは館岡家の猫となる。

(「函館ワンニャン物語 ⑫」へ続く・・・)